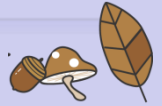


消化器・肝臓センター



NEW-す NO.53



2019.11

「がんと診断がついた時から 緩和医療は始まります」

「緩和医療」というと、死ぬ間際とか、治療法がないとか、ネガティブな意見をもつ患者さんが多いですが、緩和ケアとは、がんに伴う身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな苦痛を包括的にケアすることであるため、「終末期」と同義語ではありません。



いつ、緩和ケアを希望すればいいの？

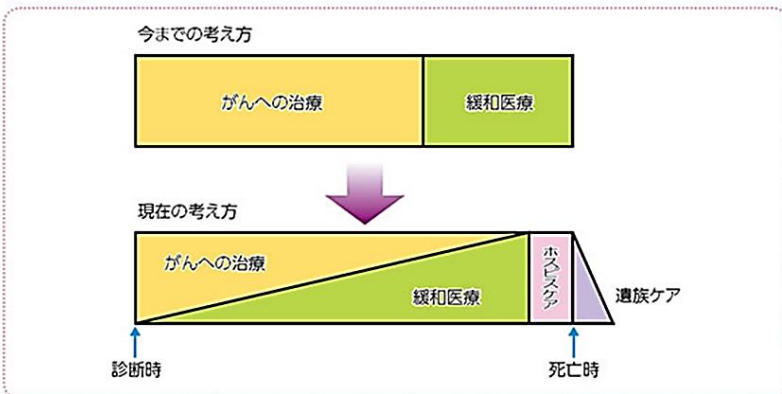
がんの治療を行いながら、苦痛のケアを行うことは必要なことなので、当院外科では、がんの治療中の方に、毎回「症状とつらさの寒暖計」という問診票を使っています。緩和ケアを希望するタイミングは、患者さんそれぞれ違います。毎回たずねることで、緩和ケアを意識していただけますし、緩和介入を適切に進めることができます。



先生に、治療が辛いって言いにくいのですが・・・。

外科外来と緩和外来の両方に通院いただく患者さんも数多くいます。患者さんは、治療医（だいたい外科医ですが）に治療のつらさをあまり言いたがりません。緩和外来で、治療の愚痴を上手に吐き出してもらい、治療を上手に継続できるのです。

図 27 がん治療と緩和医療の考え方(Oxford Handbook of Palliative Care 2005)



今回お伝えしたいことはただ一つです。「緩和は治療法がなくなった後の治療」ではないということです。貝塚病院では適切な緩和介入をおこなっております。

